

立白の時代
 V361
 No.12
 2006
 特集Ⅱ
 オルガン音楽への誘い

エッセイⅡ 「私とオルガン」 2

バッハの一部の作品に 違和感↓自作自演



オルガンと日本の民謡を結びつけることが日本のために重要

● 酒井多賀志 (吉祥寺教会オルガニスト)

1970年代、20歳前半だった私はバッハの音楽に心酔し、彼のすべての作品を30歳半ばまでにマスターしようと考えていました。しかし1970年代の後半になって、バッハの一部の作品に違和感を感じ始めました。意味も無く長く感じられ、それが「野暮」に見えて来たのです。またトッカータとフーガ・ニ短調のような、間の取り方で表現する曲は意外と少なく、多くの曲は、拍子が限定されていて、窮屈なのです。追い分け風の自由なリズムもほしいのです。またバッハの音楽には、自然の情緒を感じさせる季節感が無いこともストレスでした。前述の30歳半ばまでの計画が次第に白けて来たのです。バッハで感じた違和感は、実はヨーロッパ音楽全体の特徴でもあります。一方日本の作曲家と

いえば、当時はアバンギャルド全盛の時代であり、とても私の感覚とは掛け離れていました。オルガン曲の傑作は、ほとんどがオルガン演奏の名手によって作曲されている事実を考えると、作曲家に頼むよりも自分で作曲した方が確実だと思ひ、自作自演に踏み切りました。

1981年から完全音程を主体とした中世のオルガナムの技法で作曲を開始しました。この響きは東洋の音楽と通じる所があり、オルガンと日本の美意識をここから結びつけようと考えたのです。1985年に作曲した瞑想的即興曲「流離」は、その方向での集大成であり、1992年には、オックスフォード大学出版局から楽譜が出版され、現在までの私の作品の中で、最も人気の高い曲で、海外でも演奏されています。

1987年に武蔵野市民文化会館からの依頼で尺八と箏のアンサンブルの曲を作曲しました。これらは「流離」までの成果を生かした作曲法で、1991年にCD (TECLA) もリリースされ、話題になりました。

1990年代に入ると、日本のテーマを使って、バッハのようなフーガを作ろうと試みました。最初は、山田耕筰の「あかとんぼ」の主題による変奏曲でした。その後、「アメイジング・グレイス」や「さくらさくら」など、様々なテーマで試行錯誤をくり返しましたが、対位旋律の工夫次第で、どのようなテーマでもフーガが作れる事を確信しています。次に考えたのは、オルガンと民謡の結びつきでした。日本の地の唄とオルガンを結び付ける事が、オルガン音楽発展の為に重要だと考えたのです。私の妻が奄美島唄の研究者である事がきっかけで、島の伝統を受け継ぐ唄者の名手、坪山豊氏と、喜界島の悲劇を歌った「塩道長浜節」を初めて合せました。島唄を包むオルガンの響きが、緑深い山々や海の波のようで、とても自然で幻想的に響きました。1992年10月25日、武蔵野市民文化会館において、「吹ちゆりよ 南ぬ風」(吹き送れ 南風よ) のコンサートが実現し、その後もアンサンブルを続け、今年2006年6月、CD (自家版) もリリースしました。

1999年以来、俳句のリズムである5、7、5を取り入れた変拍子のフーガも作曲しています。スリルと躍動感にみちたフーガが出来ています。